
小瓶の中の風景

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小瓶の中の風景

【Nコード】

N2732B

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

幼馴染みの司と美里。美里は司と旅行をすると、必ずその地の砂を2粒小瓶につめていた。その行動が意味するものとは？

カシャン…。

それはとても小さな音だった。

真っ白な部屋の中に広がる、とても乾いた哀しい音――。

純白な光の中で僕は何か何だかさっぱりわけが分からなくなっていた…。

どこまでが現実で、どこまでが夢なのか。

そう。

これはきつと夢に違いない。

美里が今、こうしてここに横たわっているなんて。

「美里」

呼びかける声は行き場を見つけることができなくて、ただただ僕の周囲まわりを彷徨うばかり。

僕にはその声が蒼みを帯びているように思えた。

鬱蒼とした森に波紋を広げながら息づく、深い深い湖の蒼に…。

「美里。昨日はあんなに元気だったのにね」

蠟人形のように美しく白い肌。

白紙の上に朱色のインクをポツンと一滴たらしたような愛らしい
口唇くちびる。

そのどれもが先日までとさして変わらぬ雰囲気をかもし出しているというのに…。

彼女は答えない。

僕の呼びかけに…。

―昨日のこと――。

「司ちゃん、明日こそは遅刻しちゃ駄目だよ？」

夕日を背にして美里が言った。

ただしこれは僕の想像の中での美里の姿なんだ。僕からは今、彼

女の姿、見えないから。

「え？　僕、そんなにいつも遅刻してるっけ？」

「うん！　いつつもっ！」

黄昏時、というんだらうか。僕はその時間帯が一日のうちで一番好きなんだ。

全てが夕映えの中にすっぽりと包み込まれてしまふみたいで、何だかとても温かくて気持ちいい。

赤く色付く部屋の中で僕は受話器を片手にそう思った。

さて、僕、速真司^{はやまつかさ}と彼女、相沢美里は交際を始めて二年半。…といっても実のところ、僕と美里は幼馴染みなので、付き合い自体はかなり長い。

僕の家に向かいに美里の家があつてね、道を一本挟んだ向かいだったんだけど、なにぶん田舎だったものでほとんど車が通らなかつたんだ。本当、思い出したように日に二、三台通過していくぐらいで。

おまけに周りにあんまり家がない。

あつたとしても優に数百メートル先に点在で、子供もいないとあつちやあ、僕の遊び相手が美里だけだったとしても仕方ないよなあ。それで僕も美里も自分自身からなくなってしまうほどに長い付き合いでさ、気がつくといつも一緒にいたよ。

だからかな。一緒にいるのが当然って思ってた。

そう。

あれは丁度僕が十五、美里が十三のときだったな。

二人で村のはずれにある、原っぱにススキを見に行ったんだ。

風に揺れる白い穂がすごく綺麗でね、僕も美里も長いことその光景に心を奪われていた。

「司ちゃん、私ね、夢があるの」

美里が、瞳にススキを映してそう言った。

「どんな？」

ススキから美里の横顔に視線を移してそう尋ねたら、彼女が何も言わずにクスクスと微笑^{わら}い返すもんだから、僕は心底困り果ててしまった。きつと美里の夢ってやつがとっても気になってしまつて、それが顔に出ていたんだ。

「司ちゃんの夢、教えてくれたら私のも教えてあげる。ね！？　だから教えて？　司ちゃんの夢」

美里の奴、そう言つて僕の顔を覗き込んだんだもんな。照れくさくなつた僕は、思わず顔を背けてしまった。

しばらくの沈黙の後、僕は気を取り直して

「僕の夢は色んなところを旅すること！　とりあえず、手近なところで日本国内をね。ここみたいな田舎ばかり回るんだ。…美里のは？」

夢をひとしきり語つた後、美里の返答を待った。

自分の夢を語つたことが少しくすぐつたい気がして、なるべく美里と目を合わせないよう、眼前に広がる柔らかな茶褐色の海原ばかりを必要以上に見つめながら。

でも美里の奴、いつまで待っても答えようとしないんだ。

「美里？」

半ばじれつたくなつて、僕は彼女の方を見遣つた。

驚いた。

…としか言えないよなあ。美里、泣いていたんだから。僕は何か悪いことでも言つたんだろうか？

一瞬そう思いをめぐらせて、ブンブン…と二、三回頭を横に振る。考えてみたところで別に彼女を泣かせてしまうような発言はしていないことに気づいたからだ。

「ごめんね、司ちゃん」

彼女のごめんは泣いてしまったことに対してか。

ようやくそう口を開いてくれた美里に、僕は黙って頷いた。不器用な僕は、そうするほかに何も思いつかなかつたんだ。

「私ね、当然だと思っていたの」

「…？」

「私と司ちゃんはずっと一緒にいられるんだって。馬鹿みたいね。幼馴染みってだけだもん。そんなの無理に決まっているのに」

僕はそこまで聞いて、やっと彼女の涙の理由を理解できた。…と同時に彼女が大きな勘違いをしていることにも。照れくさくて本心をちゃんと伝えなかった、僕の言い方がまずかったんだろうか。

僕は決心をしてぐっとこぶしを握りしめた。

「美里、さっきの夢の付け足し。一度しか言わないからな？ 聞き逃したりするんじゃないぞ？」

いつもより口調が荒っぽくなっていたのは精一杯の照れ隠し。

彼女は黙って頷く。

瞳にはまだ涙が揺れていて…。

美里を泣かせちゃいけない。

そのとき僕は心のそこからそう思ったよ。第一美里は笑ってるときが一番可愛いんだ。

「付け足しっていうのはね…えっと…その…つまり…美里と一緒に…っていう言葉のことなんだ」

しどろもどろでそこまで言って、恐る恐る美里の様子を窺う。

きょとんとした瞳。

もしかしてうまく伝わってない？

泣き顔を見るのは懲り懲りだったから…僕は急いで言葉を継いだ。「つまりは美里と一緒に旅をしたいっていうのが僕の夢なんだ！」

あまりに緊張しすぎていたからか、単に恥ずかしくてたまらなかったからか、必要以上に語気を荒げてしまった。

まったくそのときの僕の心のうちといったら——まるで大都会の人込みが頭の中を往来してるって感じ。

ススキが風に揺れる、カサカサという音までが、そんな頭の中の効果音になってしまうほどだったんだから。

どうにもこうにもやり切れなくて、僕は再び視線を足元に落とし

た。

しばらくして美里のほうを見てびっくりさ。

顔が、さっきよりもっともっとたくさんの涙でぐっしょりと濡れてしまっていたんだから。

つい先刻、彼女を泣かすまいって心に誓ったばかりなのに。

僕は自分が心底恨めしかった。

それなのに……美里の奴、泣きながら口許をにこりと微笑^{えみ}の形にゆがませるんだぜ？ まったく女つてもんがよく分かんないって思った最初の出来事だったな、あれは。

でもその反面、彼女の笑顔が見られたことが、嬉しくもあつたんだ。

そんな感じで、結局後になって考えてみると、僕は美里の夢を聞けず終いでさ。タイミングを逃すと駄目だね、ああいう事は。でも不思議とそれが気になって堪らないって事はなかったんだ。

あれから七年――。

僕は旅行会社に勤めている。一応親元を出てはいるんだけど、住んでいるアパート、地理的には実家とそんなに離れていなくて。そうは言ってもあそこよりは街なんだけど。

さて、僕の勤めている会社は小さな会社でさ。しかも辺鄙なところにあったりするもんだから割と暇だったんだ。そのことが良いことだ、とは言えないんだろうけど、僕にとつては望ましいことこの上なし！ って感じでさ。社長に知れたら大目玉だろうけど。

でも、わかるよね？

忙しくないって事はきちんと決められただけ休みが取れるって事だから。

僕は休暇のたびに美里と一緒に旅行に出かけたんだ。週末を利用した日帰り旅行が主だったけど、彼女と二人きりの旅行は、あの時口にした夢が叶ったって思える分、とても充実したものだった。

そつえば、旅行の際、美里はいつも小瓶を持ち歩いていたっけ。

どこに行くときにも肌身離さずに持っていたように思う。少なくとも僕と旅するようになってからは、その先々でそれを手にしていない彼女を見た覚えが、僕にはないんだ。

さて、それを何に使うのかって言うとき、僕自身女の子のすることとはよく分らないなって思ってしまったんだけど……目的地に着くと適当な場所でサラサラの砂を見つけてはそれを二粒ほど入れるだけなんだ。

その行動は目的地に着くと必ず行われる、いわば旅先での儀式のようなもので――。

最初のうちは

「何してんの？」

そう尋ねていた僕も、近頃では全くその科白を口にしなくなった。聞いたところでクスクス笑いながら「内緒」って告げるだけで答えてくれなかったし、彼女のその嬉しそうな表情を見ているだけで、そんなことどうでもよくなってしまっていたから……。

だからその行為が何を意味しているのか、僕は未だ知らずにいるんだ。そればかりか、今では何となくそうすることが当然のこのようにさえ思えてしまう。

そう。

あの日も美里は例の小瓶を持っていた。

春も終わりの頃で、ちょっと肌が汗ばむかなって感じの晴天の日。春も終わりに近づくとい々夏に向かって一歩一歩前進しているのを感じる。

昨日より今日、今日より明日。

きつと日を追うごとに空はその蒼さを増していつている。

僕と美里は谷間たにあいの、とある村を訪れていた。その旅での一番の山場って言うのが村の少しはずれに流れている川を見に行くってことで。天気も抜けるような青空で、とっても気持ち良かったし、僕たちは清々しい気分でそこへ出かけたんだ。

川原に着くと美里はしばらくその景色に見入っていた。
僕はというとそんな彼女の姿にただただ目を奪われていて…素敵な景色だっただろうに実のところはつきりと思い出せないんだ。
そんな僕の視線の先で美里はにこつと微笑むと、いつものように小瓶のコルク栓をキュツという音とともに取り払った。
そうして青い空によく映える、真っ白なワンピースの裾をふわりと閃かせながら軽やかにしゃがみ込む。

ティーン…。

小瓶の中に砂粒が吸い込まれる音はいつもこんな感じ。

僕はその日、何故かとても不思議にフワフワとした気持ちでその光景を眺めていたつけ。

「あのね、司ちゃん」

僕を現実に取り戻したのは美里のこの声だった。

「…？」

半ば魂ここにあらずという感じだったなあ、あのときの僕。それでも彼女の声だけは心地よく耳朶を打っていた。

「私、夢が叶ったみたいなの」

にこやかに微笑む美里を背景に、その言葉は僕の周りを優しく包み込んでいった。

あ、これはいつか聞きそびれたことだな。そう思いながら彼女のセリフに耳を傾ける。

「私の夢ってね、司ちゃんとずっと一緒にいるってことだったの」
驚いて思わず口をつく、「え？」という音。美里はそれをどう解釈したのだろう？　ただ恥ずかしそうに頬を赤く染めながら俯いた。それでも言葉だけは続けてくれたんだから感謝しなくちゃね。

「私ね、大きくなったら司ちゃん、私なんか置いて一人で遠い所へ行っちゃうんじゃないかなって思っていたの。ほら、何年か前に私、司ちゃんの夢、尋ねたじゃない？　あれってね、不安だったからな

の。私の入り込む余地のない夢を司ちゃんが抱いていたらどうしよう？って。でも、あの時、司ちゃん、私と一緒に色んな所を旅するのが夢だと言ってくれたじゃない？」

そこまで言って、美里は僕のほうへ視線を投げかけてきた。下向き加減だった顔をゆっくりと上向けながら。その表情は紛れもなく同意を求めるものだったから。

「うん」

僕はとりあえず一言、そう発したんだ。それを聞くと、美里は安心したような表情^{かお}をして再び話し始めた。

「司ちゃんのこと、信じてなかったわけじゃあないの。でも、不安だったの。ほら、人の心って移ろうものじゃない？今はそう言ってくれているけど何年かしたら私の事なんて心の隅にも置いてもらえなくなっちゃうんじゃないのかしら？って」

「馬鹿。そんなことあるわけないだろ！」

僕は思わずそう叫んでしまっていた。そんな僕に、美里は、くすつと微笑ってうなずくと、

「うん、その通りね。司ちゃんはその時の言葉通り、私を色々な所に連れて行ってくれてる。だから…私の夢、叶ったかなって」

「これはその証^{あかし}」

小瓶を陽光にかざしながら美里が呟く。その言葉の意味が、その時の僕には何となくしか分からなかった。

ただ、小瓶が太陽の光をはね返す煌きだけが脳裏に鮮明に残っている。

今日は海に行こう、という予定だった。いつも行き場なんて僕任せだった美里が、初めて自分から「行きたい」と強く希望した場所がそこだったんだ。

海ならどこの海でもいいから。

上目遣いでそう告げる美里が、僕には堪らなく愛おしかった。

僕は二つ返事でOKを出した。

あの小瓶の事を思い出したんだ。砂浜の砂粒なら、中に入れるの、綺麗だろうなって。

その時の美里の喜びようといったら。見ている僕まで嬉しくなってしまうほどで。それで内心、今度は絶対に遅刻せずに待ち合わせ場所に行こう。そして美里を驚かせてやろうって決意したんだ。

僕はいつも遅刻常習犯だったから。

「司ちゃん、明日こそは遅刻しちゃあ駄目だよ？」

それは海への旅の前日に僕からかけた電話での事だ。

美里は受話器を置く間際になって、僕にそう念を押した。

「え？ 僕、そんなにいつも遅刻してるっけ？」

とぼけた振りしてそう告げた僕に、間髪入れず

「うん！ いつつもっ！」

そう即答した美里の声が、今も鮮やかに耳に残っている。

そして今。

僕は美里と二人っきりで【ここ】にいる。

真っ青な夏の海ではなく、真っ白で味気ない病室に。

慣れないことはするんじゃないやあなかった。今更後悔しても遅いのは分かっていたけれど…そうするより他に手立てがなくて。美里は僕のせいで。そう思うと居ても立っても居られなかった。

僕は今朝、遅刻する事がないように。そう思って支度を素早く終えて美里との待ち合わせ場所である駅へと向かったんだ。まだ朝が早かったからか、予想以上に早く着いてしまったみたいだね。美里はまだ来ていなかった。

待つ、なんていうのは初めてでさ。僕はとりあえず陰になった駅の一角に背を持たせかけてまぶたを閉じたんだ。今日一日の事に思いを馳せながら。

キキキキキーーーーッ！

僕の瞑想は、けたたましい音によって中断を余儀なくされてしまった。それもたったの数分で…。

目を開いた僕が目にしたものは…。

前方がまるで紙くずでも丸めたようにグシャツと潰れてしまっている黒の乗用車。

「事故？」

早朝は交通量が少ないからきつと飛ばしていたんだな。変形した車のフロント部分をぼんやりと見つめながらそんなことを考える。当たった相手は何だったんだろう？

冴えない頭でふとそう思って首を巡らせると、道にどす黒い水溜りが出来ているのが目に入った。

そしてその中心に横たわる小柄な物体。

「美里！？」

駆け寄った僕の瞳に飛び込んできたものは、亀裂の入ったあの小瓶だった。

小瓶は美里の血液で赤黒く染まっでいて…。

その傍らには硝子細工の人形みたく、青白い肌をした、血の氣のない美里が横たわっていた。

それを目にした直後の事を、僕はよく覚えていない。

ただ、気がつく^{こころ}と病室^{びつ}にいて……。手の中にはあの小瓶が握り締められていた。

きつと美里、いつもは遅刻ばかりしている僕が待っていたりしたから。自分が遅れてしまったと思い込んだんだ。それで無理をして道路に飛び出して――。

「美里」

僕の呼びかけは受け止められる事はない。

カシャン…。

それはとても小さな音だった。

僕の手から小瓶が落ちた音。

美里との思い出が音をたてて壊れてしまった音――。

「――」

今頃になって気付くなんてね。いつか美里が言っていた【証^{あかし}】の意味に。

あれはきつと、【僕と美里が一緒にいる】って事の【証^{あかし}】だったんだ。二粒の砂は僕と美里を示していたんだね。

僕は静かに足元を見つめた。

小瓶は真っ白な病室の床で、その色に同化してしまいそうなくらい存在感のない透明な色をして、粉々に砕け散っていた……。

流れ出した砂粒が、病室の色を吸い込んで更に一層、白く、哀しく光る。

サラサラと音がして……。

それは僕の前から姿を消した。

後に残されたのは小瓶の破片^{かけら}だけで。

「さよなら」

砂粒は僕にそう別れを告げた。

その日の夜遅く、美里は眠るように、そして夢見るように砂粒を追いかけていってしまった。

残された僕は小瓶の破片^{かけら}のように、ただ静かにひっそりと戻る事のない【砂粒】待っている。

そう。今も、一人きりで――。

（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございました。

10年以上前に悲しいお話が書きたくて書いたものです。
救えない内容でごめんなさい（´・ω・｀；）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2732b/>

小瓶の中の風景

2010年10月8日15時19分発行